

相成貞佐嫡子忠五郎、今御祐筆、眞理嫡子はいまだ若年故小普請

相原可碩 知行百五十石 坪田觀碩 同

右兩人十二三歳之比、碁能致候ニ付、文章院様御治世之節、桐之間へ被召出、御家人ニ相成右四人芝三田ニ而屋敷を賜、四人割付一所、相原可碩十二歳ニ而琉球人ト碁ニ勝テ、今至碁打申候、四人共御家人ニ而御役相勤、碁之家にては無之、

〔翁草 百六十六〕明和中、大坂所親名 失念虎之助と云八才の小兒有、幼年にして碁を打、當地下立賣鳥丸

西へ入町に所縁之者有て、彼處に來て逗留す、近隣之者彼と碁を挑むに皆負たり、其町に余○神幹が知音有て、虎之助を倡ひ來、余に勝負を勸む、故に其手相を尋るに、凡余に四子を著してよか

るべしとて、虎之助四ツ置て打之に、其碁勢余が如き鈍材の及處に非ず、去れども流石小兒なれ

ば、間々に虚手有故、四ツにて勝敗午角なりし、孰に尋常ならぬ器用と見えし儘、小島道芝始名大 六後號

登曾進、五段の手直りなりに是を語に、其碁を見度、由道芝申に仍、小島方會日に、余誘引して伴ひ行、あれ是と

打けるを、道芝情閲て、是普通の才に非ず、江都の家に係る奇材を常々搜索る事なれば、何とぞ

彼を家元へ吹擧して下し度と、虎之助親元を疾と承合ぬる處に、虎之助兄弟もあまた有て、親は

荒商賣の者之由、依之道芝大坂に所用有て、彼地へまかりし序に、其親元へ尋行て、爾々の由を伸

るに、親諾して、虎之助を道芝に任す、爰に於て道芝、江府へ其由を告て、虎之助を下しけるに、果

して一を聞て、十を知の良材にて、幾年を経ずして、元虎と稱し、五段の手直りと成る、此名元虎之 助ノ謂なる

べし、寛政二年に、余戲に、我は元虎に四ツ強しといへば、皆人興じて、元虎に四ツ強き人、恐らく棋

局始て以來有べからず、足下は開闢以來の妙手也と笑ひぬ、また青門主の御内何某が女に、以保

子と云、小婦有容儀も十人並にて醜からず、至て秀才伶俐にして、總て女工何によらず、巧ならず

すと云事なし、十歳の頃より碁を知て打之に、洛に於て二三番目の打手也、江府家元にて、此棋の